

○西洋史新講

大類 仲著

東北帝大教授大類仲博士の近著「西洋史新講」について、には全體にわたる二三の點について紹介すること、する。本書に對する博士の方針は次の序文によつて明である。「政治史や精神文化史を綜合的に考察した文化史的敘述を、西洋史全般に亘つて試みたいとの念頗は夙くからあつたが、さて實際にやつて見ると中々容易な仕事でない。併し大學に於ける概説の講義やその他のものを基礎として、稍以上の要求に近いものを纏め上げたのが本書である。但し近世史最近世史の場合には、綜觀的考察が特に物足らぬ嫌もあるがそれ等は又後に充分推敵の機會を得たいと思つてゐる。いづれにせよ、現今の史學が所謂單なる政治史よりも更に一層廣い視野を必要としてゐることは明白である、或ばそれを新しく考へ直された政治史と云つても大過あるまい。……」と。これによつても知られる如く政治史、精神文化史を綜合的に考察した文化史的敘述を試みられたのである。この方針については筆者は正當であると思ふ。何となれば政治史が文化史とは全く隔絶して考究されることは正當でなく、政治事象も亦文化事象の一つとして文化史敘述の中に綜合さるべきものと考へるからである。かゝる方針を以てしてこそ從來概説に於て有勝ちな政治事象敘述と文化事象敘述の間の關聯なき並立の缺陷を避けることが出来るのである。本書に於ては全體を通じて政治史事項敘述に於て個々の史實の解説を避けて、常

に一般的關聯の中に考察されてゐるのに注意される。特に近世以降の取扱ひに於て列國史への分裂を避けるため一般的傾向にしたがつて綜合的敘述を試みられてゐることに注意される。これは勿論政治事象のみのことではなく、その他各方面の敘述が「個々の史實の解説を主とせず、すべてを一般的相互關聯の立場から考察」せられてゐるのである。本書全體の敘述を通じて見てこの場合博士の考へられてゐる一般的相互關聯とは決して文化事象を唯一なるものに歸する如き意味のものとは考へられない。かつて博士は「一の時代の歴史事實には、すべて一の文化が支配的に働いてゐる次第ではなく、同一の時代に幾多の異なつた文化が同時に存在し得るのである。……歴史に於ては其の眞の本質的な唯一の生命は求め得られないし、又求める必要もない。その本質的な唯一のものは、既に歴史の圏外に屬してゐる。」(史學概論、時代とイデオの章)と述べられたが、本書の場合に於ても複雑多岐を極める歴史事象に對して各時代の一般的傾向を述べられたのである。一般的相互關聯もかゝる意味であると推察する。

先史時代より現代に至る西洋文化の流れは以上の如き方針の下に敘述せられてなり、博士の歴史に對する深い理解は隨所に示されて示唆に富んでゐる。菊版本文八百三十三頁、別に索引がついてゐる。新なる概説として精讀をおす、めする。蕪雜な紹介に終りたることを深謝する次第である。

(東京富山房發行、定價 四圓五十錢)

(監見)